

1. 『ひとはなぜ戦争をするのか』(講談社学術文庫, 2016)

アルバート・アインシュタイン, シグムント・フロイト著 (浅見昇吾訳)

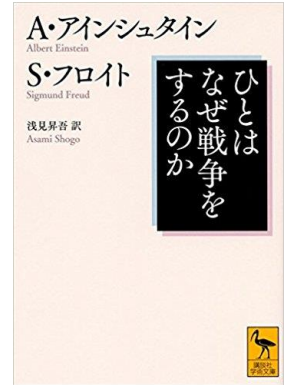
◆内容紹介

1932年、国際連盟がアインシュタインに依頼した。「今の文明においてもっとも大事だと思われる事柄について、いちばん意見を交換したい相手と書簡を交わしてください。」選んだ相手はフロイト、テーマは「戦争」だった——。宇宙と心、二つの間に理を見出した二人が、戦争と平和、そして人間の本性について真摯に語り合う。養老孟司氏・斎藤環氏による書きおろし解説も収録。

◆コメント

アインシュタインから「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか」と尋ねられたフロイトは、「人間から攻撃的な性質を取り除くことなどできそうにない。」しかし、「○○の発展を促せば、戦争の終焉に向かって歩み出すことができる!」と回答します。さて、天才物理学者の問いに天才精神分析学者は何と応えたのでしょうか!?

なお、平和運動に熱心だったアインシュタインですが、この往復書簡の7年後の1939年、当時の科学者たちがルーズベルト米大統領に送った、原子爆弾の開発を提言する手紙に署名しています。また、相対性理論から導かれた $E=mc^2$ (質量とエネルギーの等価性とその定量的関係を表す公式。エネルギー=質量×光速の2乗。質量の消失はエネルギーの発生を意味する。)は、原爆のエネルギーの計算にも使われました。ナチスドイツも原爆開発を進めていた情勢下、ユダヤ人であるアインシュタインの葛藤はいかばかりだったでしょう。



2. 『別冊 100分 de 名著 「平和」について考えよう』(NHK出版, 2016)

斎藤環, 水野和夫, 田中優子, 高橋源一郎 共著

◆内容紹介

私たちに何ができるのか?

2016年1月のEテレ特番「100分 de 平和論」のムック化。フロイト『人はなぜ戦争をするのか』、ブローデル『地中海』、井原西鶴『日本永代蔵』、ヴォルテール『寛容論』という4冊の名著を読み解きながら、平和のために「いま私たちができること」を考える。

◆コメント

1. 『人はなぜ戦争をするのか』について、精神科医の斎藤環がわかりやすく解説しています。100分 de 名著シリーズはとても分かりやすいので、ぜひ本を手にとるか、番組を見てみてください。なお、この後おすすめするハンナ・アーレントや大岡昇平を取り上げた回もあります。



3. 『夜と霧 新版』(みすず書房, 2002)

ヴィクトール・E・フランクル著 (池田香代子訳)

◆内容紹介

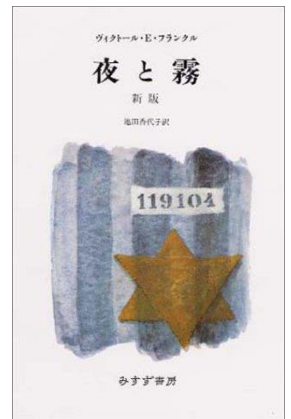
〈わたしたちは、おそらくこれまでのどの時代の人間も知らなかった「人間」を知った。では、この人間とはなにものか。人間とは、人間とはなにかをつねに決定する存在だ。人間とは、ガス室を発明した存在だ。しかし同時に、ガス室に入っても毅然として祈りのことばを口にする存在でもあるのだ〉

「言語を絶する感動」と評され、人間の偉大と悲惨をあますところなく描いた本書は、日本をはじめ世界的なロングセラーとして 600 万を超える読者に読みつがれ、現在にいたっている。原著の初版は 1947 年、その後著者は 1977 年に新たに手を加えた改訂版を出版した。世代を超えて読みつがれたいとの願いから生まれたこの新版は、原著 1977 年版にもとづき、新しく翻訳したものである。

私とは、私たちの住む社会とは、歴史とは、そして人間とは何か。20 世紀を代表する作品を、ここに新たにお送りする。

◆コメント

フランクルはフロイトやアドラーに師事したユダヤ人精神医学者です。ウィーン大学医学部神経科教授でしたが、1942 年にナチスによって強制収容所に送られます。被収容者 119104 番として「内側から見た」強制収容所の実態を、心理学者の目で観察して描写しました。淡々とした文体ゆえに、リアリティがひしひしと伝わってきます。「未来を、自分の未来をもはや信じることができなくなった者は、収容所内で破綻した。」では、人は絶望的な状況下でどうすれば未来を信じることができるのでしょうか。必読です。



4. 『戦争は女の顔をしていない』(岩波現代文庫, 2016)

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著 (三浦みどり訳)

◆内容紹介

ソ連では第二次世界大戦で 100 万人をこえる女性が従軍し、看護婦や軍医としてのみならず兵士として武器を手にして戦った。しかし戦後は世間から白い目で見られ、みずからの戦争体験をひた隠しにしなければならなかった――

500 人以上の従軍女性から聞き取りをおこない戦争の真実を明らかにした、ノーベル文学賞作家の著書。(解説=澤地久枝)

◆コメント

「男性は戦争を欲望し、女性は平和を希求するというジェンダーによる戦争表象」(中川成美『戦争をよむ』, 岩波新書, 2017) の常識を問い直すことは、戦争を相対化するうえで不可欠です。男性とは異なる形で戦争を戦った女性たち。2015 年度ノーベル文学賞作家が世に問うた「女性によるリアルな戦場の記録」を、ぜひ手に取ってみてください。



5. 『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社, 2009)

6. 『戦争まで 歴史を決めた交渉と日本の失敗』(朝日出版社, 2016)

加藤陽子 著

◆内容紹介

かつて、普通のおよき日本人が「もう戦争しかない」と思った。世界最高の頭脳たちが「やむなし」と決断した。世界を絶望の淵に追いやりながら、戦争はきまじめともいべき相貌をたたえて起こり続けた。その論理を直視できなければ、かたちを変えて戦争は起こり続ける。だからいま、高校生と考える戦争史講座。

日清戦争から太平洋戦争まで。講義のなかで、戦争を生きる。生徒さんには、自分が作戦計画の立案者であったなら、自分が満州移民として送り出される立場であったならなどと授業のなかで考えてもらいました。講義の間だけ戦争を生きてももらいました。そうするためには、時々戦争の根源的な特徴、時々戦争が地域秩序や国家や社会に与えた影響や変化を簡潔に明解にまとめる必要が生じます。その成果がこの本です…『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』「はじめに」より

◆コメント

佼成女子はSGH校としてグローバルリーダーの育成に力を入れています。しかし、真にグローバルな人は、自分が生まれ育った国や地域の〈過去・現在・未来〉に対する洞察を持っています。特に、過去すなわち歴史を多角的に知り、そこに通底する本質を考察することは重要です。

この本は、池袋のジュンク堂書店で開講された「加藤陽子の連続日本近現代史講座」の講義録です。講義に参加したのは中学二年生から高校三年生までの中高生 28 名。つまり、皆さんと同世代の生徒と対話的に考察を巡らせた過程を書籍化したものなのです。

ぜひ、自分もその 28 名に混ざって講義を受け、一緒に同じテーマについて考える、という状況設定をして読んでみてください。きっと今までにない知的興奮を覚えるはずですよ。



7. 『小さいうち』(文春文庫, 2012)

中島京子 著

◆内容紹介

昭和初期、女中奉公にでた少女タキは赤い屋根のモダンな家と若く美しい奥様を心から慕う。だが平穏な日々をやがて密かに“恋愛事件”の気配が漂いだす一方、戦争の影もまた刻々と迫りきて一。晩年のタキが記憶を綴ったノートが意外な形で現代へと継がれてゆく最終章が深い余韻を残す傑作。著者と船曳由美の対談を収録。

◆コメント

戦時中の日本は全てが軍国主義に染まった暗い時代だったというイメージを持っていませんか。そんな一面的な見方を覆してくれる小説です。2016年にヒットした映画「この世界の片隅に」が好きな人はきっと気に入るでしょう。



8. 『憲法とは何か』(岩波新書, 2006)

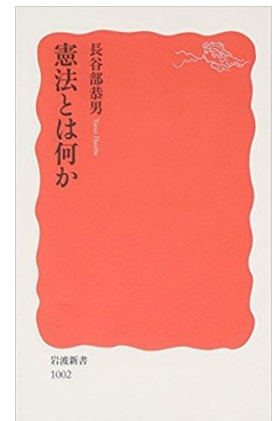
長谷部恭男 著

◆内容紹介

憲法は何のためにあるのか。立憲主義とはどういう考えなのか。憲法はわれわれに明るい未来を保障するところか、ときに人々の生活や生命をも左右する「危険」な存在になりうる。改憲論議が高まりつつある現在、憲法にまつわる様々な誤解や幻想を指摘しながら、その本質についての冷静な考察をうながす「憲法再入門」。

◆コメント

憲法とは「国家の基本となる構成原理」であり、戦争は「相手方の権力の正統性原理である憲法を攻撃目標とする」ものだというのが、長谷部教授の見解です。つまり、相手国を成り立たせる根本である憲法にまで手を突っ込んで書き換えるのが戦争だということです。長谷部教授は、2015年6月4日の衆議院憲法審査会において、自民党推薦の参考人にも関わらず、安保法案を憲法違反と明言した気骨のある憲法学者として有名です。しかしこの新書はそれよりもずいぶん前に書かれており、立憲主義とは何かを考えるうえで大いに役立つでしょう。



9. 『「戦争」を語る』(文藝春秋, 2016)

立花隆 著

◆内容紹介

「知の巨人」、はじめての戦争本!
「長崎という街に自分が生まれ、そこが世界で二番目に原爆を落とされたという事実は、僕の人生に大きな影響をもたらしました」
被爆の記憶を後世に残すために、日本人は何をすべきか?
北京からの引揚体験、特攻隊上がり青年教師、原水禁運動に打ち込んだ若き日。
ヒロシマ、ナガサキ、アウシュビッツを通して、いま伝えておきたいこと。

◆コメント

立花隆を知っていますか。ジャーナリストとして、絶頂期の田中角栄を退陣に追い込むスクープを発表して一躍有名になり、その後はノンフィクション作家として人文科学・社会科学・自然科学の全てにまたがる広汎な著作を世に出し続けています。以下、代表作のタイトルを見ただけで、その広大な知的好奇心がうかがえるでしょう。『田中角栄研究』『宇宙からの帰還』『臨死体験』『精神と物質—分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』『脳を鍛える (東大講義 人間の現在)』『武満徹・音楽創造への旅』『天皇と東大 大日本帝国の生と死』『解説「地獄の黙示録」』
そんな知の巨人立花隆が、どんな思いで戦争を語るのか。
「被爆者がいない時代がもう目の前に来ている。それはどういうことかと言うと、『最後の被爆者が今日死にました』というニュースが流れる日は確実に君らの世代に本当に起こるのです」(Eテレ「立花隆 次世代へのメッセージ〜わが原点の広島・長崎から〜」より)



10. 『野火』 (新潮文庫, 1954)

大岡昇平 著

◆内容紹介

敗北が決定的となったフィリピン戦線で結核に冒され、わずか数本の芋を渡されて本隊を追放された田村一等兵。野火の燃えひろがる原野を彷徨う田村は、極度の飢えに襲われ、自分の血を吸った蛭まで食べたあげく、友軍の屍体に目を向ける…。平凡な一人の中年男の異常な戦争体験をもとにして、彼がなぜ人肉食に踏み切れなかったかをたどる戦争文学の代表的名作である。

◆コメント

究極の戦争文学。覚悟して読んでください。ハマった人は『俘虜記』もどうぞ。映画「野火」もおすすめ！



11. 『ハンナ・アーレント - 「戦争の世紀」を生きた政治哲学者』 (中公新書, 2014)

矢野久美子 著

◆内容紹介

『全体主義の起原』『人間の条件』などで知られる政治哲学者ハンナ・アーレント (1906 - 75)。未曾有の破局の世紀を生き抜いた彼女は、全体主義と対決し、「悪の陳腐さ」を問い、公共性を求めつづけた。ユダヤ人としての出自、ハイデガーとの出会いとヤスパースによる薫陶、ナチ台頭後の亡命生活、アイヒマン論争一。幾多のドラマに彩られた生涯と、強靱でラディカルな思考の軌跡を、繊細な筆致によって克明に描き出す。

◆コメント

ハンナ・アーレントは 20 世紀を代表する女性思想家です。

1933 年にゲシュタポに拘束されるが出獄してドイツを脱出。プラハとジュネーブを經由してパリに亡命し、ユダヤ人青少年のパレスチナ移住を支援。しかし 1940 年にフランス政府によって敵性外国人とみなされて収容所に拘束される。だが再び脱出し、アメリカへの亡命を果たす。戦後明らかになったナチスの非人道行為の本質を理解すべく研究と執筆を進め、1951 年に『全体主義の起原』を公刊し、一躍注目を浴びる。

ということで、とにかくすごい人なのですが、上記はまだ彼女の前半生です。1963 年、アーレントがニュー Yorker 誌に連載した『イェルサレムのアイヒマン』をめぐる、大論争が勃発します。アイヒマンとは、ナチスのユダヤ人部門責任者アドルフ・アイヒマンのこと。ユダヤ人の「最終解決」のため、収容所への移送の計画と実行を担った人物です。1960 年に、アルゼンチンの路上でモサド (イスラエル諜報部) によって拉致され、イスラエルでの裁判のすえ 1962 年に絞首刑に処せられました。そんなアイヒマンのことを、ユダヤ人であるアーレントはどのように評したか？

映画「ハンナ・アーレント」もおすすめ！



12. 『世界の果てのこどもたち』 (講談社, 2015)

中脇初枝 著

◆内容紹介

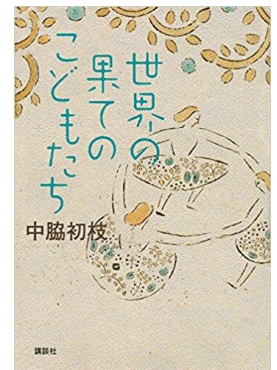
戦時中、高知県から親に連れられて満洲にやってきた珠子。言葉も通じない場所での新しい生活に馴染んでいく中、彼女は朝鮮人の美子(ミジャ)と、恵まれた家庭で育った茉莉と出会う。お互いが何人なのかも知らなかった幼い三人は、あることをきっかけに友情で結ばれる。しかし終戦が訪れ、珠子は中国戦争孤児になってしまう。美子は日本で差別を受け、茉莉は横浜の空襲で家族を失い、三人は別々の人生を歩むことになった。

あの戦争は、誰のためのものだったのだろうか。

『きみはいい子』『わたしをみつけて』で多くの読者に感動を与えた著者が、二十年以上も温めてきた、新たな代表作。

◆コメント

満洲国について知ることは、現代においても大きな意味を持ちます。まずはこの小説をきっかけに関心を持ってみてはいかがでしょうか。国家の中枢が遂行した戦争は1945年に終わりましたが、周縁にいる一人ひとりの人生は終戦後も国民国家に翻弄されます。中国残留孤児に関心を持った人は、山崎豊子の長編小説『大地の子』も手にとってみましょう。



13. 『戦争と平和 ある観察』 (人文書院, 2015)

中井久夫 著

◆内容紹介

戦後70年、神戸の震災から20年の節目の年、精神科医としてだけでなく文筆家としても著名な著者が、あの戦争についてどう考えどう過ごしてきたかを語る。歴史学者の加藤陽子氏との対談では、戦争の記憶、昭和天皇のこと、日中関係など様々なことが語られる。

また、神戸の震災のときのことを振り返りつつ、東北の災害についても語る。神戸元町の老舗書店、元海文堂書店社長の島田誠氏と神戸の街と震災について語り合った対談も収録。

◆コメント

中井久夫は日本の精神病理学を代表する精神科医で、専門は統合失調症の治療法研究です。なぜ平和という状態を維持することが困難か。戦争の過程において指導者層や市民にはどのような心理が働くか。精神科医らしい視点で分析していきます。現代日本にも通じるところがあるのではと考えさせられることでしょう。



14. 『一九八四年 新訳版』 (ハヤカワ epi 文庫, 2009)

『NINETEEN EIGHTY-FOUR』 (Penguin Student Edition, 2000)

ジョージ・オーウェル著 (高橋和久訳)

◆内容紹介

“ビッグ・ブラザー” 率いる党が支配する全体主義的近代未来。ウィンストン・史密斯は真理省記録局に勤務する党员で、歴史の改竄が仕事だった。彼は、完璧な屈従を強いる体制に以前より不満を抱いていた。ある時、奔放な美女ジュリアと恋に落ちたことを契機に、彼は伝説的な裏切り者が組織したと噂される反政府地下活動に惹かれるようになるが…。二十世紀世界文学の最高傑作が新訳版で登場。

解説/トマス・ピンチョン(文庫版のみ)

◆洋書版内容紹介

Hidden away in the Record Department of the sprawling Ministry of Truth, Winston Smith skillfully rewrites the past to suit the needs of the Party. Yet he inwardly rebels against the totalitarian world he lives in, which demands absolute obedience and controls him through the all-seeing telescreens and the watchful eye of Big Brother, symbolic head of the Party. In his longing for truth and liberty, Smith begins a secret love affair with a fellow-worker Julia, but soon discovers the true price of freedom is betrayal.

◆洋書版著者紹介

George Orwell (1903-1950) served with the Imperial Police in Burma, fought with the Republicans during the Spanish Civil War, and was a member of the Home Guard and a writer for the BBC during World War II. He is the author of many works of non-fiction and fiction.

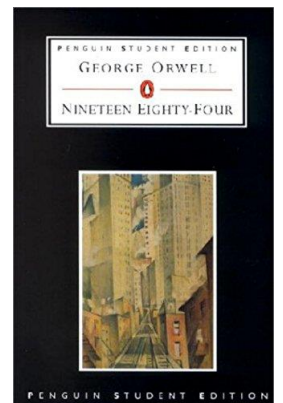
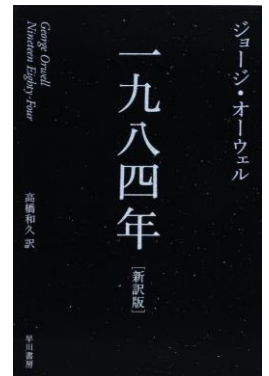
◆コメント

必ず読もう。今無理なら、来年でもいい。とにかく、大学に入るまでには読みましょう。

ちなみに、ジョージ・オーウェルは「cold war (冷戦)」という言葉は初めて用いたと言われています。終戦からわずか2ヶ月後の1945年10月19日付 the Tribune に寄稿した論文「You and the Atomic Bomb (あなたと原爆)」でのことです。その論文の末尾でこう述べています。

If, as seems to be the case, it is a rare and costly object as difficult to produce as a battleship, it is likelier to put an end to large-scale wars at the cost of prolonging indefinitely a *'peace that is no peace'*. (もし原爆が、たとえば戦艦を造るような金がかかって、滅多に手に入らないものであるとすると、原爆は大規模な戦争に終止符を打つもののように思える。ただし、それは無期限に続いていく“平和のない平和”という代償を払っての話だが。)

20世紀後半の世界を予言した洞察力に圧倒されますね。



15. 『本当の戦争の話をしよう』 (文春文庫, 1998)

『The Things They Carried』 (Mariner Books, 2009)

ティム・オブライエン著 (村上春樹訳)

◆内容紹介

村上春樹が敬愛する作家の短編集。ヴェトナム戦争で若者が見たものとは？

日ざかりの小道で呆然と、「私が殺した男」を見つめる兵士、木陰から一歩踏み出したとたん、まるでセメント袋のように倒れた兵士、祭の午後、故郷の町をあてど

なく車を走らせる帰還兵…。ヴェトナムの・本当の・戦争の・話とは？〇・ヘンリー賞を受賞した「ゴースト・ソルジャーズ」をはじめ、心を揺さぶる、衝撃の短編小説集。胸の内に「戦争」を抱えたすべての人におくる22の物語。

◆洋書版内容紹介

A classic work of American literature that has not stopped changing minds and lives since it burst onto the literary scene, *The Things They Carried* is a ground-breaking meditation on war, memory, imagination, and the redemptive power of storytelling.

The Things They Carried depicts the men of Alpha Company: Jimmy Cross, Henry Dobbins, Rat Kiley, Mitchell Sanders, Norman Bowker, Kiowa, and the character Tim O'Brien, who has survived his tour in Vietnam to become a father and writer at the age of forty-three.

Taught everywhere—from high school classrooms to graduate seminars in creative writing—it has become required reading for any American and continues to challenge readers in their perceptions of fact and fiction, war and peace, courage and fear and longing.

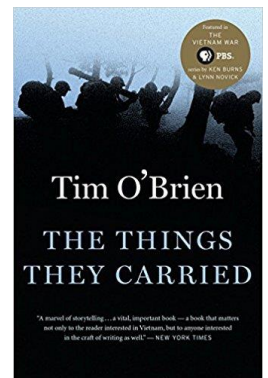
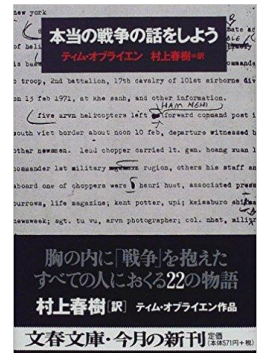
◆洋書版著者紹介

Tim O'Brien (1946-) received the 1979 National Book Award in fiction for *Going After Cacciato*. His other works include the acclaimed novels *The Things They Carried* and *July, July*. *In the Lake of the Woods* received the James Fenimore Cooper Prize from the Society of American Historians and was named the best novel of 1994 by Time.

◆コメント

この短編集の主題は安易な「反戦」ではありません。ではいったい何か。語り手の言葉を引用しますので、ぜひ小説を読んで考えてみてください。

And in the end, of course, a true war story is never about war.



*この読書案内に挙げた本は、国語科秋田・吉川が選定しました。内容紹介は全て出版社が記載した文を転記しています。コメントは秋田が記載しました。